

令和4年度【第12期】第4回長野県生涯学習審議会 議事録

日時 : 令和4年9月6日(火) 13:30~15:30
場所 : 県立長野図書館 信州・学び創造ラボ オンライン併用(ZOOM)
出席者 : 西 一夫(会長)、秋葉 芳江、泉山 莉奈、小池 玲子、関 正浩、
長峰 夏樹、樋口 正幸、深野 香代子、堀内 絹代、松田 晶弘、
毛受 芳高、森田 舞、柳澤 礼子 (13名)

1 開会

○事務局(増尾課長補佐兼総務係長)

【会議成立の確認】

【配布資料の確認】

【審議会公開の確認】

2 会議事項

(1) 審議の進め方

西会長

会議事項でございますけれども、「(1) 審議の進め方について」ということで、本日の資料の説明及び審議の進め方について、まずはお諮りしたいと思います。事務局からの説明をお願いいたしたいと思います。

赤池生涯学習係長

まずは資料の御説明をさせていただきたいと思います。画面の共有をさせていただきます。

資料1でございます。「長野県生涯学習審議会(第12期) 審議の進め方(R4.9)」と題した資料を御覧願います。本審議会の進め方について、改めて御説明させていただきます。

審議事項は1のとおりでございますけれども、本県の生涯学習・社会教育の振興の基本的な方向性や具体的な施策について御提言をいただくものです。

「2 スケジュール」になりますけれども、昨年9月に第1回審議会を開催して以降、これまで3回審議を重ねていただき、本日は4回目となります。先ほど会長からもお話がありましたように、本日がまとめの会となりまして、お集りいただくのは一旦これで区切り、最後と考えております。

本日いただきました意見を踏まえまして、西会長と事務局で修正案をつくりまして、確定を行い、おおむね10月頃に西会長から県教育長に提言をしていただきたいと思いますと考えております。その後、県教育委員会の定例会等を通じて、現在策定作業中の第4次教育振興基本計画に反映をしていくという段取りを考えております。

また、本審議会と並行して開催されております、これからの長野県教育を考える有識者懇談会にもこの審議会の議論の進捗を報告していきたいと考えております。

続きまして、参考資料を御覧いただきたいと思っております。こちらは先ほど申しました、第3回これからの長野県教育を考える有識者懇談会の資料でございます。

こちらは県全体の教育の方針を考える長野県教育振興基本計画をどのような記載にしていくかということを検討している会ですけれども、こちらで議論されていることにつきまして、触れさせていただきます。

資料の真ん中辺りになりますけれども、「個人と社会のwell-beingの実現」のために必要な資質、能力として探究力が必要ではないかという議論が行われ、それに基づいて現在検討が進められておるところでございます。

本審議会においても、探究は一つの大きなキーワードということで議論をされてきましたので、本審議会の議論も全体の計画に反映をしていきやすいのではないかと考えております。

続きまして、資料2を御覧いただきたいと思っております。こちらは、前回の第3回の審議会において頂戴した御意見に対し、どのように事務局で対応したかということを表した表になります。

第3回の審議会では、非常にたくさんの御意見を頂戴しました。その中から、主なものを取り上げさせていただきます。提言の案に対して、記載事項に具体的に反映していくものもあれば、その先を見据えて、施策をどう推進していくかという段階で検討していきますとしているものなど、様々書いてございますので、御発言について、それぞれ確認をしていただければと考えております。

続きまして、資料3-1及び資料3-2を御覧いただきたいと思っております。こちらは前回の審議会においてお示した「すべての人が学び合い、共に変わり続ける“シン・生涯学習社会”へ」の骨子案を、委員各位からいただいた御意見を踏まえながら取りまとめた提言書の案となります。

資料3-1が本文になりまして、資料3-2が概要のポンチ絵になります。

修正の趣旨などについて、ポイントだけでございますけれども、かいつまんで御説明をさせていただきますと思っております。資料3-2を御覧いただきたいと思っております。

左上の「趣旨」のところでございますけれども、この提言が見据える未来の時間軸、どのぐらいの時間を射程に置くべきかということを書かせていただいております。おおむね2035年を展望する中・長期的な視点に立って、今後5年間における本県の生涯学習・社会教育振興の基本的な方向性についての提言とさせていただきます。

時間については、前回の審議会ではなかったのですが、現在、県全体の総合計画の議論の中で、2035年を展望する中・長期的な視点に立って、今後5年間における施策の展望とございまして、総合計画の射程距離と合わせて、このような記載にさせていただきます。

続きまして、上の「基本理念」の部分でございますけれども、前回の審議会でも、学びというものは、個人のものから公共のものへつなげていくことが大事という御意見も頂戴しました。それを踏まえて、基本理念の部分に「すべての人がつながり」ということで、「つながり」という文言を追加しております。

次に「真」の生涯学習の項目ですけれども、こちらは赤い字のところになりますが、下に「『生涯学習者』の育成」という項目を設けさせていただきました。こちらは前回の審議会において、中高生などの比較的若い年齢の方から、探究学習を実践していくことで生涯を通じて学習し続ける人、言わば生涯学習者になることができるという御意見もいただきましたので、生涯学習者を育成していくということを項目立てしてはいかがかと思ひまして、このような項目を立てております。本文では7ページにその記載がございます。

次に「新」のところを御覧いただきたいと思ひます。五つ目の◆の部分ですけれども、前回ですと「学びへのハードルが下がり、日本一学びやすい長野県へ」という記載にしておりましたけれども、ハードルが下がりだとややネガティブな印象もありますので、「希望が高まり」としたほうがよいのではないかという御意見も頂戴しましたので、そのような記載に修正しております。また、学んだことが活かせることが大事だということもありますので、「日本一学びやすく、学んだ成果が活かせる長野県へ」と記載を修正しております。

次に、下の「学びの新しい基盤整備」の部分ですけれども、「オンライン学習の活用推進」を追加しております。どうしても図書館ですとか、公民館ですとか、学校、そういった社会教育施設、学校教育施設の議論に偏りがちではあるので、これからの生涯学習はそれだけではなくて、民間ですとか、オンライン、eラーニングなど、そういったものを活用していくことも大事ではないかという御意見もいただきましたので、このように追加しております。

続きまして、その下に「デジタル・ディバイド解消」という項目がございますけれども、こちらは前回の骨子案ですと「リテラシーの向上」という記載にさせていただいておりましたが、リテラシーの向上よりもより大きな概念としてデジタル・ディバイド、つまり情報格差の解消の必要性、また、それに向けた幾つかのアイデアをたくさんいただきましたので、大きな項目を「デジタル・ディバイドの解消」とさせていただいております。

また、多くの意見をいただいたこととしては、デジタルが苦手な高齢者の方々に若者が先生役になってデジタルの使い方などを教えていくこともとても有効だという御意見も頂戴しましたので、「多世代によるデジタルツールの学び合いの場づくり」といった記載も記しております。

右の「信」のところですけれども、前回の審議会でも地域における探究学習ということをもうちょっとフォーカスして書いてみてはいかがかという御意見もいただきました。地域も探究のフィールドとして非常に有効だということで、「『答えのない問い』に対して、地域の特性に応じた『自分たちの答え』を探究する」という記載にしております。

「つながり」のところは、先ほどの基本理念と同じ趣旨で反映をしております。

下の「社会的包摂の推進」の部分ですけれども、「障がい者の生涯学習の推進」というものを一つ項目として立てております。長野県では、今年度4月に「障がいのある人もない人も共に生きる長野県づくり条例」を一部施行しております。障がいのある人の自立や社会参加に向けた取組等に関しての施策を推進していくとしており、障がい者の生涯を通じた学習機会というものは一層大事になっていくと考えております。国でも障がい者の生涯学習については力を入れていくようですので、項目を一つ独立させて立てております。

下に「国籍、経済状況、孤立・孤独等、様々な事情で学びの機会に恵まれていない人へ

の学習機会の提供」という記載がございますけれども、長野県はグローバル企業の立地も盛んであったり、地域においても外国籍の方が増えてきて、地域住民の中でのつながりの多様性も増してきているという御意見もありましたので、グローバルな視点を入れて、国籍ということを追加しております。

下の「社会教育分野と福祉分野の連携」も追加しておりますけれども、近年、福祉分野や社会教育分野というのは非常に近い関係にあるということで、両者を連携していくことも大事ではないかという意見もいただきましたので、追加しております。

下の「多様性を活かした地域コミュニティづくり」の部分ですけれども、「公民館主事等、地域住民に寄り添いコミュニティの課題解決力を引き出す中間支援人材の育成」を追加させていただいております。こちらは前回の審議会で、公民館主事など、住民同士をつないでコーディネートする人材がこれから非常に大事だという御意見をいただいたことを踏まえて反映したものでございます。

最後「学校と地域、家庭が互いに成長するスクール・コミュニティの形成」と書いてございますけれども、こちらは最初「学校と地域」と書いていたのですが、やはり家庭も大事ではないかという御意見をいただきましたので、「家庭」という文言を追加したところでございます。

これらを詳しく記載したものが、資料3-1の本文となります。

資料の説明は以上となります。

次に本日の審議の進め方について、御提案を申し上げたいと思います。

本日は、最初に、ただいま御説明いたしました提言案に対する御意見や感想などの意見交換を行っていただき、提言案をよりブラッシュアップしつつ、委員の皆様からのおおむねの提言に対する御同意を頂戴できればと考えております。

その後、お時間が許す限りではありますけれども、この提言をどのように実現していくか、具体策、具体的にどうしていくかなどについて、委員の皆様の御意見を伺う場としてはいかがかと考えております。

事務局からは以上でございます。

西会長

ありがとうございます。

今、事務局から資料の説明、議事の進行について提案をいただきました。今の御提案のような形で本日は進行してまいりたいと思いますけれども、いかがでございましょうか。よろしいでしょうか。

(「異議なし」と声あり)

西会長

それでは、事務局の提案に基づいて進めてまいりたいと思います。

(2) 「これからの生涯学習・社会教育の充実に向けた提言（案）」について意見交換 西会長

それでは、意見交換ということで、本日お手元にあります提言案全体に目を通しながら、要所要所御意見をいただき、表現の修文を行えばよろしいかと思っております。主に資料3-1をベースに見ていきたいと思っておりますけれども、概要を広げていただいて、対応関係、あるいは少し文言が不足しているのではないかと、こういった言い回しがあったほうがいいのかというところも見ていただければと思います。

まず提言案をめくっていただいて、3ページ「1 提言の趣旨」ですが、先ほど2035年までの中・長期的な展望ということが文言として具体的に今回入ってきているということでございました。趣旨については特に問題はないと思っておりますけれども、いかがでしょうか。この部分については大きな前提ということになってまいりますので、そこはよろしいかと思っております。

3ページから4ページの「2 現状認識」ですが、どういった社会が、今、私たち長野県の中で目の前にある実態なのかというところを大きく3点挙げていただいておりますけれども、この部分の取りまとめについてはいかがでしょうか。「より不確実で正解のない時代（VUCA）」「人生100年時代、3ステージからマルチステージの人生へ」「誰一人取り残されることのない社会の実現」という形で、それぞれ内容について、概要、現状認識の文章が添えられている形になっておりますが、この点についてはいかがでしょうか。

1点目「より不確実で正解のない時代（VUCA）」の部分については、いかがでしょうか。概要でも現状認識を三つ挙げて、より簡潔に項目立ててまとめていただいておりますので、そちらを参考にさせていただいてもよろしいかと思っております。いかがでしょうか。オンラインで御参加の委員も積極的に御発言いただければと思いますので、遠慮なさらず、声を上げてください。

関委員

これで結構だと思いますけれども、強いて意見を言わせていただくと、基本理念のところで「つながり」というキーワードを入れていただいた件がありますので、「より不確実で正解のない時代（VUCA）」の2段落目、「また、地域社会においては、急速な人口の減少などにより地域の担い手が不足し活力が低下するなど」とありますが、この後辺りに社会的なつながりが途絶えてきているとか、希薄になっているとか、あるいは孤立している人が増えているとか、そういう現状認識に立ち、だからつながりを回復する必要があるという流れができると一層いいのではないかと思いますけれども、本文に特に異を唱えるものではありません。

西会長

基本理念の中で、今回新たに「つながり」という語彙が入ってきたことに伴って、現状認識の1点目の第2段落、2行目の辺りです。「地域の担い手が不足し活力が低下するなど、つながりが希薄になる」などの文言を入れて、全体の基本理念との整合性を取ってはいかがかということになりますが、いかがでしょうか。

小池委員

確かに「つながり」というところは、とても大事にしているところだと思いますが、4ページ目の「誰一人取り残されることのない社会の実現」というところで、「本県においては」から始まりまして、外国籍の住民のお話があって、その次に「経済状況から起きる様々な格差の拡大」とあるのですけれども、まずは本県の実情を述べて、その上でさらに「本県においては、世界を相手とした」と、この順番を逆にしたほうが県民の方に受け入れられやすいと思います。まずは長野県の実情、さらに本県ではということところは、順番を逆にしたほうがいいような気がしたのですが、いかがでしょうか。

西会長

記載の順序を少し工夫しておいたほうがよいのではないかと、少し大きいところから入って、県の実情という形に整えておいたほうがよいという御意見でありましたけれども、同様の感想をお持ちの方はおられますか。

毛受委員

私も最後の「誰一人取り残されることのない社会の実現」のところ、いきなり外国人というところがトピックになるのは、今、御指摘のとおりで、まずは中心としての長野県に長くいらっしゃる方々に対する現状認識、だから、今回のケースだと経済状況における分断とか、社会的に置かれた状況における分断というところの認識を示して、ほかにも外国人とか、性的マイノリティーとか、そういうことを書いていただいたほうが、確かに違和感がないということが一つです。

もう一つは、資料3-2のほうでもお話をしたかったですけれども、学歴の問題です。高卒で就職した人たちが学びの対象としてあまり認識されていないような感じだったので、障がいとか、性的マイノリティー、ジェンダー、国籍と並べている中に、学歴があってもいいのではないかと思います。後ほど資料3-2のほうで述べたいと思うのですけれども、高校から働いている子たちをいかに生涯学習者として巻き込んでいくかみたいなことは、かなり重要なトピックだと私は思っておりますので、その辺も話せるような現状認識を入れていただくといいと思いました。

西会長

それぞれの人生のキャリアデザインのような部分についても、触れておいたほうがよいというお話であったかと思えます。

現状認識が3点ありますけれども、ほかの部分であれば、また御意見をいただきたいと思いますが、いかがでしょうか。

小池委員

順番が変わってしまうのですが、二つ目の「人生100年時代、3ステージからマルチステージの人生へ」というところで、生涯学習の理念の中に「誰もが生涯、学び合い、学び続け、自らの人生と自分たちの社会を創造できる環境をつくります」と書いてあるのですけれども、どうしても生涯学習というと、学校教育を修了した後の大人向けと思っている人

もいますが、人生の基盤をつくるのはやはり小さい子供の頃からの積み重ねで学び続けるという基礎ができていくと思うので、そこら辺の文言を少し入れていただいて、幼い頃からの学びを大事にしたい。

地域の担い手がいなくなってきたというのは、親世代、じいちゃん、ばあちゃん世代が地域の担い手として子供たちを育ててこなかったからだと思います。人口減少だけが問題だったら、今、地域を担う人はいっぱいいるはずですが、でも、担っていないということは、その学びをしてこなかったからだと思います。なので、私たちが子供たちから見捨てられないようになるには、小さい頃からの学びを続ける。それは当然学校教育もあるのだけれども、学校教育以外のところでも学び続けるという姿勢というか、体制をつくっていくことも大事ではないかと思いました。

西会長

特に第2段落の辺りでしょうか。「学校教育を修了した後も引き続き学び続ける人」というニュアンスのところに、もう少し学校や地域での教育とか、学校教育での学びを受けて、その後うまく続けられるかどうかというところだと思ったのですけれども、地域、家庭、学校というつながりでしょうか。今の小池委員の御発言は、その辺りが一貫したものという、学校教育以後ではなくて、さらに家庭や学校、地域、そういったところでの学びから具体的に学校での様々な学び、それを踏まえてという形になるのでしょうか。今の御発言はそんな理解でよろしいですか。

小池委員

そうですね。家庭ですが、今、家庭教育力の低下とよく言われていて、乳幼児を支えて学びをつけるべき家庭が少しずつ弱くなってきているので、そのところに、生涯学習というのは生まれたときから生涯にわたって学ぶということだみたいなことを付け加える。誰が担当するかではなくて、理念としてこういうふうに考えたいというところ辺りを付け加えてもらうといいと思いました。

西会長

理念を書くというよりは、ここはあくまでも現状認識で、逆に現状として学校教育を修了した後も学び続ける人と学びを止めてしまう人の二極化が今あるという理解であって、それをどう改善するかということで、次の提言につながっていくという理解に立てば、このところはそこまで書き込まなくてもいいと整理はできそうですけれども、今、小池委員におっしゃっていただいたことは、現状認識として今こういう課題があるから、基本理念に基づいてこういう施策の骨子の中に取り込んでいくという形の生かし方でもよろしいでしょうか。

小池委員

家庭教育力の低下などが現状としてあるというところは、少し入れてほしいです。地域の教育力とか、家庭の教育力などが低下していることは、現状としてはあると思うので、そこら辺も追加していただくといいと思います。

西会長

この後の具体的な提言の中で、その辺りをうまく盛り込めそうかどうかというのは、検討していきたいと思います。

あと、いかがでしょうか。現状認識の部分についてはよろしいでしょうか。

毛受委員

先ほどの「誰一人取り残されることのない社会の実現」のところですけども、「経済状況から起きる様々な格差の拡大や異なる背景」とあるのですが、要は子供の貧困とか、子供だけではないいろんな貧困みたいなことを意図しているんですね。貧困という言葉はあえて使わなかったのかと思いますが、切実感があまり感じられないというところが気になります。

先ほど小池委員もおっしゃっていたのですが、家庭の教育力という話に貧困の問題がかなりリンクしているので、この表現を読み込むとそうなのですけども、そこはもうちょっとストレートに言ってもいいのではないかと思います。

西会長

文言の部分になるので、最終的には調整をさせていただきたいと思います。

ほかはいかがでしょうか。御自由に御意見をいただければと思います。

柳澤委員

元に戻ってしまうのですが、現状認識の一番最初の○（VUCA）のところですが、先ほど関委員がおっしゃった“つながり”のところですが、現状認識は、2035年という長期的なことを見据えていながらも、これからの5年間のことを考えるときに、これからの5年間はコロナからの回復ということがどうしても大事になってくると思います。先ほど関委員がおっしゃった現状認識のところですが、「地域の担い手が不足し、ここ数年のコロナ禍により人と人とのつながりが薄れ、地域コミュニティの衰退が懸念される」のような文言を入れておくといいと思います。これからの5年間は、ウィズコロナ、アフターコロナということになると思いますし、後ろの地域コミュニティづくりのところ、対話を繰り返して学び合うということも出てきますので、そちらにつながっていくのではないかと思います。

西会長

ありがとうございます。

その辺りは、文言を少し追加できそうです。5年という時間の区切り方の中での短期的な文言としては、十分に生かせるのではないかと思います。

森田委員

そもそものことですけども、これを誰のために、何のために、誰に向けてみたいところが私は分かっていなくて、県民の人がこれを読むことによって、そこから長野県はこんなことをやってくれるというところを見せるものなのか、そこが私の中でイメージが湧

きません。ペルソナというか、誰にどういうふうに思ってもらいたいものなのかというゴールは何かありますか。

西会長

基本的には県民に向けての提言になって、これを施策に生かしていただくということです。そういう理解でよろしいですね。

久保文化財・生涯学習課長

直接的には審議会として、これからの県の施策に対して、こういう方向性で施策をやっ
ていってほしいということもありますし、もう一つは、行政機関だけが動いていけばいい
というものではありませんので、広く県民の皆様に対しても、やはり学習者自身が県民お
一人お一人でありますので、これからの社会を見据えて、お一人お一人が学習者として、
こういう視点も持っていただきたい、あるいは地域を持続的にするためには、施策もある
けれども、一人一人の学びということも、こういうふうにしていただきたいというような
提言だと受け止めていただければと思うのですけれども、いかがでしょうか。

森田委員

これは審議会の委員が県に対してお伝えするものですか。

久保文化財・生涯学習課長

一義的にはそうなります。

森田委員

私たち県民はこういうことをやっていきたいと思っていますみたいな、県民の代表とし
てこれを県にお願いしますというイメージですか。

久保文化財・生涯学習課長

施策としてこういう施策をやっけていってほしいということもありますし、県民の皆
さん全体への呼びかけという意味合いもあろうかと思えます。

森田委員

両方ということですね。

久保文化財・生涯学習課長

はい。

森田委員

分かりました。ありがとうございます。

西会長

いかがでしょうか。現状認識はこれくらいで、先へ進めたいと思いますが、よろしいでしょうか。

それでは、5ページ、6ページの「3 基本理念」です。今回「つながり」という言葉が追加されたということで、その部分についての解説、そして、大きな三つの“シン”についての概説とイメージ図という形になってきている部分ですけれども、この後の具体的な施策の方向性の概要になるかと思いますが、この部分はいかがでしょう。

柳澤委員

5ページの3-1、下から2行目の「生涯にわたり身に付け続け」というものですが、ここの言葉は「持ち続け」でもいいのではないかとというのが1点目です。

それから、その行の「当たり前ができる」のところに「。（句点）」がありますが、これは「、（読点）」です。

3-2の1行目のところですが、「最新のテクノロジーの最大限活用」ですが、これは「を」です。

一番下の行に「多様な個性の混ざり合いの中で」とあるのですが、ほかのところにもこの言葉が出てきていますので、「多様な個性が混ざり合う中で」とシンプルにほかとそろえたほうがいいのではないかと思います。

西会長

「てにをは」が整っていないところも若干あったので、私も気にはなりましたが、あとはいかがでしょうか。細かなところでも結構です。

小池委員

今さらながらで申し訳ないのですが、いろんなところに「自分自身を変え続けていくこと（自己変容）」という言葉が出てくるのですが、県民からすると、自分自身を変え続けていくということは、どう変えていくかというか、例えば豊かに変えていくとか、変えていくその先が見えないというか、変わり続けることはとても大事なわけけれども、その先、何を目的としてというところが不明確な気がしてしまって、いろんなところに関わり続けるという言葉、自己変容が出てくるのですが、例えば自分自身を豊かに変えていくとか、変えること目指すところというか、何か言葉が欲しいような気がするのですが、いかがでしょうか。

西会長

今のところは「自分自身を変え続けていくこと（自己変容）が必要である」という、「つながり、学び合い、共に変わり続ける」という部分についての概説のところ、もう少し前につく言葉かあってよいという御意見だったかと思いますが。いかがでしょうか。

秋葉委員

自己変容は私なりに思うところがあって、前回は意見を述べさせていただいたので、今

の御指摘ありがとうございます。そこはとても大事な御指摘をいただいたと思って、口を開いております。

私が思うに、変わり続けることの目標は、実は今の時代にあって、お一人お一人非常に多様ではないかと感じております。もちろん経済的に豊かになるために変わり続けたいと思う人もいるでしょうし、経済的ではなくて、精神のゆとりを持ちたいがために変わり続けたいと思う方もおられるでしょうし、もっと地域の中で自分の居場所を求めたいと思って変わり続けたいという方もおられる。

枕言葉、今、御指摘があった目的に当たる部分というのは、多様性の時代にあって、実はそれぞれが違うのではないかという思いを持っております。ただ、言えることは、それぞれが思う自分が望ましい未来に向けて、自分が変わっていくという手段は共通しているのではないかと感じております。ですので、今、御指摘のあった枕言葉をつけると文章的にはすごく分かりやすくはなるのですが、多様な人々にこのテキストがはまりづらくなってしまうと、ちょっともったいないという気がしております。

変わり続けるということは実は手段であって、その目的はもちろんここでもwell-beingとか、掲げてはいますけれども、それぞれの方がそれぞれの目的に向かうための手段だと私自身は捉えております。

西会長

小池委員、いかがでしょうか。

小池委員

今のお話を聞いていると、自己実現という言葉がよくあるのですが、生涯学習そのものは自己実現だけではなくて、いろんな意味合いを含めているので、そこは「つながり、学び合い、共に変わり続ける」という、変わり続けることの意味というか、より高いところを目指すとか、自己実現にしても何かが欲しいような気がするのですが、ほかの皆さんはどうでしょうか。

森田委員

今の小池委員のお話のように、変わるということに対して抵抗がある人たちが結構いて、変わらなければいけないみたいな強迫観念みたいなところにもつながると思うので、やはり「何々のために変わろう」と言われると受け取りやすいと感じました。お母さんたちなど、今、精いっぱいなところに、変われ変われと言われることの負担は大きいと思います。

そうすると、今、秋葉委員が言ってくださったように、「それぞれの幸せに向かって」とか、「それぞれの目的に向かって」みたいな言葉が入ると、自分なりの幸せに向かって学び続ける、変わり続けるということで、学ぶとか、変わるということに抵抗がある人も、自分なりの幸せでいいのだとか、自分なりの目的でいいのだと受け取りやすくなると思います。

特に勉強が好きではない、それこそ先ほどの高卒でという話になると、向上心がないから駄目みたいに思って、変わるという言葉に抵抗がある人は結構いるのではないかと感じたので、そういうものがついていると、もう少し幅広い人に受け取ってもらえるというの

は、私もちょっと感じました。

毛受委員

2点ありまして、一つは、今、話題になっているところですが、「不確実で、正解のない時代」というのが最初にあって、この状況が何を我々に要求しているのか。新しく私たちは生涯学習として何に対応しなければいけないのかということで、その目的というか、変わり続けることの意味みたいなものは、確かにあったほうがいいのではないかと思います。

そのときに、生涯学習というのはどうしてもほんわかしてしまって、切実感が薄れるところに、生涯学習が強くない原因があるのではないかと思います。今、直面しているのは、今までやっていた仕事なくなる。なくなるから新しい仕事に向き合うということ、生きていくためにそこは学ぶ、新しいスキルを身につけて、次の仕事をちゃんと得て、しっかり豊かに生活をしたいという、生きていくための学びと、もう一つは、単なる仕事だけの問題ではなくて、地域で環境問題とか、電力が不足しているとか、様々な社会課題が生まれてくるのですが、誰も解決策を持っていない、分からない。だけれども、話し合しましょう。どうしたらここで解決するかみたいなことをみんながプレーヤーになって話し合う。それこそ白馬高校の皆さんがやっている地域と一緒に問題解決していく学びというものと、あとは、秋葉委員がおっしゃったような、それでも単なる社会のスキルを身につけるとか、社会課題を解決するという強制されるものではなくて、何か知りたいとか、こういうものを知ることができてすごく豊かになったとか、well-beingにつながると思うのですけれども、シンプルにいろんな不思議なものに触れて、わっとなるような学びというのが、変えるため、生涯学習という意味では、一人一人が生み出す変容、促していく変容みたいなものができると思うので、この解釈は三つを意識して新しい生涯学習をつくらうと思っているので、この部分に関してが一つです。

もう一つ、3-2の最新のテクノロジーの活用、「新」というところですが、「新」は、どうしてもテクノロジーを使って新しい学びをつくりましょうみたいな、ここだけ非常に具体的な感じがします。「新」は、先ほど学歴の問題があったのですけれども、最終学歴に我々はやたらと支配されていて、これは以前の審議会でもお話ししたのですが、最新学習歴を更新しようという考え方が今いろんなところで引用されていて、本間正人さんという方が言い始めたのですけれども、ここにせつかく「新」という言葉を入れるのだったら、最終学歴から最新学習歴にして、いつも学びをアップデートしていく。次々に学んでいくということにした上で、それをどこの場所でもいつでも学べる、学び直せるように、新しいテクノロジーを生かしてやっていくみたいなことが書けると、ほかの「シン」とちょうど交わるようになるのではないかと思います。

西会長

今、ちょっと伺っていて、後ろの具体的な施策で文言を入れておいたほうがいいという感じがしたところです。あくまでもコンセプトとしての方向性の位置づけということになります。ありがとうございました。学習歴を更新していく。そういう意味では、先ほどの自己変容とか、自己更新ということが、学んでいくということとのつながりの中で考えて

いけるのだらうということかと思えます。

毛受委員

アップデートという、楽しげな感じがあるといいと思えます。

松田委員

今、生涯学習ということを問われていると思うのですがけれども、自分がいかに楽しいことを学んでいけるか、子供たちが楽しいことを学んでいるか。子供たちに対しても、自分が興味を持っているものと持っていないもので学びの度合いはかなり変わってきます。私たち高齢者は、デジタルは無理だ、全く関係ないと思っています。でも、植物等興味のあるものは、学んでいきます。

秋葉委員が言われたように、いろんなことがあると思うので、その人個人によって生涯学習の目的が変わっていくと思えます。私としては共に変わり続けるという言葉はこれを目指していると思えます。

生涯学習が何を提言しようとしているのか。私たちのスキルアップもあるし、豊かな老後を暮らせるということもあるし、子供たちが生涯学び続けるとは何かということもあると思うので、あまり狭くなると広がりがなくなってしまうと、提言しようとしている目的が分からなくなってしまうと思えます。

西会長

先ほどの小池委員から出た自分自身を変え続けていくという、その辺りとの関わりだと思った次第でございます。それぞれの思いの実現とか、それぞれがよりよく生きるため、よりよく生きるためと言うと、どうしても強制感が若干生まれるという気は私もちょっとするので、その辺りの文言は慎重であらねばならないと思ったりもしていました。

よろしいでしょうか。あと、三つの柱、具体的な施策の方向性についてございますか。よろしく申し上げます。

長峰委員

6ページの3-3「学び合いから『信』頼を紡ぐ」のところですが、本文の中で、4行目から立場を超えた対話を繰り返しながら学んでいこう、信頼を紡いでいこうということですが、その後が「誰一人取り残されることなく、持続可能な社会を」とちょっと飛んでいると思っていて、国で地域共生社会という理念を福祉分野を超えて打ち出していますので、その中のフレーズで、人口減少の中で支える・支えられるの枠を超えて、みんなが主役で地域づくりをしていく。

高齢者はもちろんですが、障がい者とか、今の福祉分野の一番の課題は、ひきこもりの若者とか、40代、50代の方々、本当は世界の主役になれるはずの人たちが、今、引き籠もっている。そういう方々が何とか対話とか、つながりをつくる中で、地域で活躍できるようにしていくことが、人口減少の中では一つの答えだろうということが福祉分野の課題ですが、学びながら支える・支えられるの関係を越えて、みんなが主役の地域づくりという考え方を入れていただくのは、同意いただけるのではないかと思ったところ

です。

西会長

3-3の最後、下2行の文章のつながりのところですね。支え・支えられながら、信頼関係の下に地域をつくって、誰一人取り残されることなく、持続可能な地域社会をつくるというイメージの内容になりますでしょうか。

長峰委員

今までの支える・支えられるの関係を超えて、みんなが主役にしていく工夫をしよう。ひきこもりの方も障がいのある方も何かつながりがあって支援をしていけば、本来、主役になれるはずだというニュアンスが入ったら、国の地域共生社会という理念とつながるのではないかということが一つです。

西会長

そこは文言を検討させていただきたいと思います。今の点について、もし御意見があれば、いかがでしょうか。

信頼というところの柱になっている部分ですので、これまで支える立場にあった者がやがて支えられる立場になる。そういった関係性の中でという部分で、最後の一文にうまくつなげられるようにしてはいかがかということです。よろしいでしょうか。

特に御意見がないようでしたら、施策の方向性、具体的にそれぞれの柱、こんなことが具体的な施策としてもそれぞれの柱でできるのではないかという辺りも含めて、御発言がいただけるとよいと思っております。

7ページの最初の「真」ですけれども、ここの部分は「① 『生涯学習者』の育成」と今回新たに文言を追加、項目立てをしていただきました。そして「② 働く世代、子育て世代等の学び直し、つながりづくり」「③ シニア世代の多様な学びの推進」。①が大きくくりになって、②③と年齢的な経過をたどりながらというニュアンスがおおよそあると私はこの順序を読み取っておりますが、最初の柱についていかがでしょうか。

毛受委員

話合いの中でも、生涯学習者になっていくためには、若いうちから実践していくことが大切だということで、白馬高校の実践だったり、学校段階のときに、私らは生涯にわたって学び続けるということが認識されている状態で送り出していくみたいな、段階論みたいなものがあるといいのですけれども、黒ポツのところは自然体験とか、今でもやっているものになっているところがあって、例えば高校段階までにとか、高校段階と言うと具体的過ぎるのかもしれないのですが、もうちょっと若い時点での学びの姿勢の育成とか、そういうものがもう少し入ってこないか、下の黒ポツがあまりにも総花的な感じで、誰に対して言っているのかというイメージが湧かない。もう少し若者の中で、次の大学に行くとか、最終学歴の獲得だけの学習ではないことをしっかり学ぶ、教えるとか、もう少し活かすような言葉が欲しいと思いました。

西会長

下の具体的な話題についてということであったかと思います。

関委員、今の御発言を受けていかがでしょうか。

関委員

そのとおりだと思います。4-1の「① 『生涯学習者』の育成」を読みますと、一層学校教育の重要性を感じているところです。先ほど御意見があったように、学びの原点というのはやはり好奇心だと思います。わくわく感とか、学びは面白いという気持ちを年少のときから養えるような学習環境が家庭でも欲しいし、地域でも欲しいし、学校でも欲しい。そういうことが今の話の中に書き込めればいいと思います。

今、高校教育でも新しい学習指導要領になりまして、どのように学ぶかというところが一番力点を置いて学習活動をしています。つまり覚える学びではなくて、どうすれば答えにたどり着けるのか、どうやれば学びを進められるのかという、そういう学びを主流にしていこうということで取り組んでおりますので、そういう流れが生涯学習者の育成というところには結びついていくと思っているところです。

西会長

今そういう環境にある泉山委員、いかがでしょうか。

泉山委員

今おっしゃったように、私自身もどのように学ぶかみたいなのは、ガールスカウトでも、学校などでも、実際にそういう感じでいろんな活動をしているので、もうちょっと具体的というか、若い年齢からどういうふうに学んでいくのかということも、詳しくあってもいいと思います。

西会長

先ほどの有識者懇談会の資料で、テーマとして、探究という言葉が設けられています。探究力がキーワードになるということとの絡みを考えていくと、具体的な施策として、教育の中でここに探究的な学びの深まりとか、推進とか、そういったことを盛り込んでいてもいいと思いました。例えば先ほど関委員からお話がありましたけれども、幼年期から探究的な考え方とか、取組を系統的に継続してやっていくことの必要性があるのではないかと、それをぜひ施策として盛り込んでほしいということでのものとして言えると思ったりします。

自然体験の機会というと、今、森のようちえん、ああいった活動などもこういったところにつながってくる、自然と触れ合う幼児期の育児みたいなのが一つポイントになってくると思うので、それを包括するような形で有識者懇談会の探究力という言葉を使ったものとして、ここに一つ入れておくというのは手かもしれないと思って、お話を伺っておりました。

毛受委員

例えば①の項目の意図というのは、こういう場をつくることで、それこそ幼年期から小中高などの場の中で、多様な探究的な場をつくることによって、生涯学習者として学齢期を終えて送り出すみたいなの、場をつくりましょうというのは、既に各学校で取り組んでいるので、このことを思って先ほどの生涯学習者として社会に加担をしていこうではないかみたいに書くと、意味が出てくると思います。

西会長

文言には2回「探究的な学び」という言葉が使われているのですが、そのところがメッセージとしてうまく伝わるような書きぶりや項目ということでしょうか。

毛受委員

はい。

森田委員

先ほど関委員が言った好奇心という言葉は、学びにすごく大事だと思っていて、どんなことなのだろうか、先ほどのわくわくもそうですし、これを学んだら自分はどういうふうに変わっていくのだろうかみたいなわくわくがあるから、やはり学んでいると感じました。

私の世代だからなのか分からないのですが、探究という言葉はあまりメジャーではない言葉ですが、好奇心というのは子供でもみんな分かります。なので、好奇心のほうが入ってくるという感じがしたので、「好奇心を育てる」とか、「好奇心を生かす」という言葉が入る学びの場を子供のうちからというのは確かにと、関委員の言葉が入ってきたので、探究より身近な感じがしました。イメージが湧きました。

西会長

好奇心を持ち、そして、それをより探究的な物の考え方、そういったものに広げたり、深めたりしていくという、少し接続性が見えるような言い回しでもいいと思いました。やはり年齢とか、そういうものに依拠して、語彙が変わってくるというメッセージも少し出せるといいと思いました。

秋葉委員

今、4-1の生涯学習者のところのディスカッションをしていると認識しているのですが、先ほど毛受委員からあった最終学歴から最新学習歴へは漏れていたと思って、明確に入れておきたいと思って、ここがいいのか、次の働く世代云々のところがいいのかちょっと迷うところではあるのですが、最終学歴から最新学習歴ということを進捗するとか、黒ポツが施策につながっていく入り口になるとすると、ここなのか、どこかにその文言は入れておきたいというのが一つです。

それから、好奇心とか、わくわくというのは、私も教育現場の人間としてすごく大切にしていることで、ちょっとでも入れられたらと思います。ただ、探究というのはそれに対する姿勢の話で、好奇心というのはその入り口です。ですから、そこは整理をして、好奇

心をトリガーにして、姿勢として探究的な学びをするので、実はそのプロセスがわくわくだという、3段階の構成になっていると私は整理をしていますので、先ほど会長にとでも分かりやすい表現をしていただいたのですが、そんなところを意識するとより伝わりやすいと思いました。

あと、先ほどの最新学習歴と関連するのですが、黒ポツの候補として、学びのプロセス、それぞれの学びの履歴をストックしていくような仕掛けやそれを促すようなことに取り組んでいく、そういうことを具体的な例示として挙げられたらよいと思います。生涯学習者と言ったときに、生涯学習者とは何なのだろうかというときに、自分の学びの履歴が蓄積されていっている、そういう自発的な学び方をするのが生涯学習者なのだとすると、もう少し生涯学習者のイメージが伝わりやすくなると思ひまして、「学びの履歴」とか、「学びのプロセスをストックする」とか、そんな表現が私の頭の中には浮かびました。

西会長

確かに学習者、あるいは学習歴という言葉はどこかでうまく取り上げられるといい。私の個人的な感じとしては「① 『生涯学習者』の育成」というところが一番包括的に取り上げている部分なので、落ち着くと思いますが、少し検討が必要かもしれません。

あと、4-1、ほかのところでも結構です。いかがでしょうか。オンラインで御参加の委員もよろしいかと思いますが、いかがでしょうか。

片仮名語彙のところは、世代を超えて分かっていたかというようにということで、結構言い換えの言葉を入れていただきました。どうしても片仮名語彙が増えてきてしまうので、そうすると、何を言われているのかよく分からないという御意見もいただきますので、そういったところができるだけ分かりやすく、若者たちにも落ち着きやすく、また、ある程度の年齢の方にもそういう内容なのねと、文意をちゃんと取ってもらえるようにということで入れております。

毛受委員

誰一人取り残されない生涯学習というのが全体のテーマだとすると、改めてこうやって見返してみると、この中に子育て世代が入ってきます。次にシニアに入ってくるということで、先ほど学歴の問題で高校から社会に出た人たちへの学びについて少しお話ししたのですけれども、リスキリングとか、リカレント教育では、高校卒で働いている子たちのキャリアがあまり念頭に置かれていないです。

ですから、今、子育て世代が入っていて、外国人とか、そういう方も入っていて、次に③でシニア世代が入ってきます。もうちょっと若者の課題を包摂するような、社会から一度隔絶した若者たちとか、私なんて社会に要らないと思ってしまったような若者たちも、生涯学習でもう一回社会に参画していくきっかけが持てるような、そんなことが見えるような②にしてもらえるとよいと思いました。

西会長

働く世代のところは、もう少し具体的に幅があるということが書き込めるかどうかということかと、今、私のほうで伺っておりました。

それ以外にいかがでしょうか。「③ シニアの多様な学びの推進」辺りなどはいかがでしょう。

「長期化する人生」というのは、どきっとしました。長期化というのは、そうかと思いました。ここは文言を考えたほうが良いと私は思いました。

松田委員

シニア大学などで言われていることで、「人生100年」ということなので、教育過程みたいなものもあればいいなと思います。

西会長

現状認識のところでは、人生100年時代到来と出てくるので、それが長期化と言われると、うーんと、喜んでいいのだろうかと思いました。

長峰委員

これは発言するだけ発言させていただきたいと思いますが、「③ シニア世代の多様な学びの推進」ですけれども、8ページの上から3行目に「シニア大学等、年齢によらずいつでも学べる場づくり」とありますが、ここを「年齢や心身の状況によらず」と改めていただけないか。車椅子になってということはありませんし、また、認知症が進んだ方が仲間をつくって学ぶ中で、地域の支援者、ボランティアを育てるという例はいくらでもあるのです。そうやって要介護になっても助けられ上手になって、地域に貢献するという例は幾らでもあるので、そこまで攻めていただけるとうれしいと思いますが、言うだけ言います。

西会長

年齢だけではなくて、身体的な部分、あるいは心の部分、今、認知症というお話もちょっと出てまいりましたけれども、そういったところまでも含めて、そういう学びができる、学べるという、そういった場づくりという形のメッセージを伝えてはどうかということだったと思います。

柳澤委員

先ほどの話の続きですけれども、人生100年時代を迎える人が非常に増える時代の入り口のところにいる5年間で、「③ シニア世代の多様な学びの推進」のところは、もう少し膨らませてもいいと思っております。

下のシンのところには、例えばこういうことが有効であるということが具体的に一つずつ書いてあるような形で、前のほうもそうですけれども、今日はこれから時間があれば、具体的なアイデアについても話し合うということですが、そういったことが一つでもいいから入れられると、膨らむのではないかと思います。

今、シニア大学は、高齢者にとっては居場所だけではなくて、この文言のつながりでは、社会の課題解決に役立つ部分になるということもありますので、例えば公民館であれば、「シニアが社会と関わり続けるために、公民館が中間支援組織としての機能を果たす」という言葉を入れたら、具体的になると思います。後ろのほうで、公民館主事の中間支援人

材という言葉がありますが、公民館というものが中間支援組織としての機能を果たす。そのことによって、高齢の方が社会とつながりを持ち続けられると考えますので、そのような言葉が入ったらいいと思います。

泉山委員

今、シニアの皆さんのことに関して、公民館のことを入れてはどうかという意見をおっしゃっていたと思うのですが、私も近いようなことを考えていて、もしかしたらずれている意見かもしれないのですが、実際に私の周囲の地域の方とか、自分の祖父母などを見ていると、実際にシニア大学とか、そういったところに積極的に出ている人はかなり少ないと思います。そういったシニアの方々が一番近いのは公民館だと私は思っています。なので、公民館活動の活発化というところもここに入れてみてもいいのではないかと思います。その後の4-3の②地域コミュニティとか、そこにもつながってくるかもしれないのですが、シニアの人たちが一番地域とつながれるのはそこだと思っています。

西会長

ここにも少し公民館をベースとしたというような、活動の拠点を位置づけるということでもよいという御発言だったと思います。

会議の時間もだんだん詰まってきておりますので、先に進めたいと思います。

二つ目ですけれども「4-2『新』しい学びの推進」ということで、学びの新しい基盤整備、デジタル技術を活用した学び、あるいはデジタル・ディバイドの解消、こちらは今回新たに加筆をされてきたところ、リソースの部分、技術的なものという部分が大きな柱になっているかと思いますが、いかがでしょうか。

長峰委員

4-2の①の新しい基盤整備のところですが、現状の図書館とか、公民館とか、福祉の視点から見ると、ハードとか、ソフトでまだバリアがある状況があって、そこをここにしつこく書くことはできないと思うのですが、新しい技術を活用して、ハード・ソフトのバリアフリーを推進するという項目をさりげなく①の黒ポツの中に入れていただくことはできないかと思いました。

その後の4-3に社会的包摂の項があるので、この前の段階で現状、行きたくても入れない、聞きたくても情報保障がないとか、どうしても障がいの当事者だとまずそこが気になってしまうと思うので、さりげなく入れていただいたらどうかと思いました。

西会長

技術的な面、設備的な面でのバリアフリー化ということかと思いますが。確かに図書館とか、博物館に行きたくても行けない場合に、例えばデジタルアーカイブで見ることができるとか、そういったことを進めていくとともに、やはり実際に出かけられたときにもバリアフリー化がされているのは当然ですが、それだけではない形での新しい学びが実現できるようなものということになるかと思いますが。

松田委員

図書館のほうで、デジとしょ、情報が取れる内容が入っているのですけれども、そういうものが8月から始まりました。そういうものを入れて、これからそれがどんどんバージョンアップしていけば、どこでも図書館というか、家から本が見られる。図書館に遠い人でも自宅で見られます。自宅で見られることに対し、デジタル化が、私たち高齢者は分からない。そういう具体的なもの、この5年間でここまで行きますというものが入ればいいと思います。高齢者はコンピューターを使いこなすことは、難しいと思います。

もう一点は、前にニュースで、長野県のNPOがやっていたと思うのですが、何日も他の人と話したことの無い高齢者の方と、Zoomでつながって、いろんな情報を流したり、お話を聞いたりということが放送されていました。そういう具体例が入ればいいと思います。

西会長

下のポツのところに、例えば図書館であれば、デジとしょとか、そんな言葉を少し具体化して入れることが可能かどうかというところは、ちょっと検討してもいいかもしれないです。私もちょっとだけ使ってみました。大変便利です。老眼の私には拡大ができるというのは、最大のいい点です。ありがたい。

堀内委員

皆様の御意見をお聞きしていて、今、浮かんだのは、うちの父のことです。90歳になるのですが、今もって地域の図書館に連れていってもらって、本を読んでいるという学びを続けています。実際、本当の高齢者、80歳の皆さんは、デジタルとか、そういう機器というものは、具体的な話をすると、なかなか入り込めないのだろうと思うので、そういうところにも対応できるような表現、まだ私たちも学べるという希望が持てる表現をここに少し加えていただくとうれしいと思いました。

西会長

様々な形で学ぶ機会をアピールできるようにしていただければということのようです。

松田委員

「② デジタル・ディバイドの解消」ということで、格差が結構あると思います。堀内委員がおっしゃったように、デジタル機器が使えない方がおられるのですけれども、先ほどから言っているように若者が教える、行政がこういう機器を貸与する。これからITとか、そういうものがどんどん進捗していくと、いろんな機器が出てくると思います。今もスマートフォンでデジとしょが見られる状態です。先ほど西会長が言われたように、字が大きいので、私らのように老眼ですと見えないということもあるのですけれども、それをiPadか何か、ちょっと画面の大きいものを、学校の様に1人1台、高齢者の方に行政から貸し与えて、それでニュース、情報とかを流せるようにすれば、情報格差は解消していくのではないかと思います。

西会長

使いましよと言っても、なかなか使いこなせない現実が徐々に出てきている。今だと恐らく小学生が一番使える。大学でも私以上に使いこなせる学生が多いという現実がありますので、その辺りは使いやすくしていくということ、ハードルを下げっていくということも大切だと思います。

4-2ですけれども、いかがでしょうか。

特に御発言がなければ、4-3まで見た上で、また全体を通して御発言、あるいはこんな施策ができるのではないかとということについても、少し時間を割きたいと思いますので、御発言いただければと思います。

それでは「4-3 学び合いから『信』頼を紡ぐ」というところで、三つ目の柱でございます。

大きく二つありまして、「① 社会的包摂の推進」というところは、下位項目、細かなところが加筆されてきております。

二つ目が「② 多様性を活かした地域コミュニティづくり」ということで、これも公民館主事など、地域住民に寄り添い、コミュニティの課題解決を引き出すような人材育成ということが出てきて、ここにも「ワクワク」という言葉が具体的に出てきておりますので、全体が少し明るい提言になるといいと思いますが、いかがでしょうか。

西会長

地域の人材育成ということも関わってきているかと思いますが、深野委員、この点はいかがでしょう。

深野委員

最後の地域コミュニティと言っているところですが、公民館活動も重要ですが、やはり生涯学習につながるという、幼い頃からということがありますので、こちらにあるような学校と地域、家庭が互いにというところで、学校の位置づけというのが実はとても大事だと思っております、おじいちゃん、おばあちゃんが動く事例なども多々あります。そういった意味で、多様性というところは、地域コミュニティの形成にすごく重要だと思っております。

西会長

学校、地域、社会、家庭という形で、長野県は特に信州型コミュニティスクールが全部の学校で導入されている形になっておりますので、そういう意味で地域とどう学校が関わられるかということも、一つ学校として、教育の側の課題としてもあるのだろうと思っておりますので、その辺りが少し課題になるということのようです。

あと、いかがでしょうか。先ほど「① 社会的包摂の推進」というところにも関わるといって御発言いただいていたのですが、長峰委員、いかがでしょうか。

長峰委員

社会的包摂のところをすごく丁寧に書いていただいている、すばらしいと思って見させ

ていただいております。

一つ要望ですけれども、9ページの下から4行目ですが、柳澤委員がおっしゃった中間支援組織という言葉はとてもいいと思うのですけれども、中間支援人材という言葉が引っかかっておりまして、社会教育主事の講座をお手伝いさせてもらったのですが、いろんな教科書でコーディネーターと言い換えているところが多いと思うのですが、ここはコミュニティの課題解決力を引き出すコーディネーターの育成、要望は「育成と連携」と入れていただけないかと思っております、多分野のコーディネーターが地域にいますので、「育成と連携」ということも入れていただきたいと思っております。

西会長

柳澤委員のコメントが参りました。「学校が地域や家庭と連携することで」というところ、今、長峰委員から御指摘があったところの一つ下の行になろうかと思っております。9ページの下から3行目のところかと思っております。「学校が地域や家庭」という形で、学校が主格で上がっているの、「学校、地域、家庭」を並列関係の中に位置づけておいたほうがいいのではないかという御意見です。今のままでは、学校が連携しなさいと言っているようなメッセージになってしまう。なので、それぞれがそれぞれとの関係づくりをしていく必要があるというメッセージにしたほうがいいたらいいだろうということのようです。

毛受委員

一つは、社会的包摂の推進のところで、高校卒業後、社会に出る人たち、早い段階から働き始めている人とか、表現はもう少し柔らかくしながら、「高齢者、障がい者、外国籍住民、厳しい経済的事情に置かれている人、孤立・孤独に悩む人」と書いてあるのですが、早く社会に出る子たちもこの中で具体的に記述をしてもらおうと新しくなるので、そこに向けたメッセージ、自分に言われているという気持ちになるような表現を工夫してもらえないかというのが一つです。

二つ目は、先ほどコーディネーターの話、中間支援人材の話がありました。まさに私たちが担っている分野であります。中間支援人材というのは、ぴっと頭に入ってこないところがあるので、コーディネーターなどの育成と活躍していく仕組みみたいなものが必要です。育成だけしてコーディネーターの資格を取りました。だけれども、どこでどう活躍したらいいかというところの仕組みがこの20年進んでこなかった。ずっと言われているので、そこは「仕組み」という言葉も目標として入れてもらおうといいと思っております。

下の黒ポツのところ「誰もがワクワクできる公民館活動」と書いてあります。公民館をやっている方はイメージが湧くと思うのですけれども、公民館活動と言っても県民には伝わってこないところがあるので、様々な学び合いとか、誰もが学べる講座とか、もう少し公民館活動の中で新しくやりそうな文言が入ると、伝わりやすくなると思っております。やっていらっしゃる方は、公民館活動と言えば分かるというイメージだと思うのですけれども、新しさももう少しそこに織り込むような文言が入るといいと思っております。

今日、我々のサマーセミナーの資料を持ってきましたけれども、多様な人たちが学ぶ、教え合い、学び合いみたいな講座を公民館の中でやるとか、具体的で新しいものを若干組み込んでもらえないかと思っております。

西会長

公民館活動という形で一くくりにしてしまうと、公民館から足が遠のいている人にとってみると、具体的にどういうことをやってくれるのか、地域としてどういう役割なのだろうかということは、若い人たちにもなかなか伝わってこない部分があると思いますので、その辺りは少し修文が必要だと、今、お話を伺っていて思ったところです。

森田委員

先ほどの「学校が地域や家庭と」というところで、気になって探したのですけれども、10ページの最後のところに「スクール・コミュニティの形成」とあって、スクール・コミュニティは何かと、今、検索をかけたのです。コミュニティ・スクールは聞いたことがあったのですけれども、スクール・コミュニティというのは学校を核とした地域とか、家庭の連携ということなので、関委員がやられている白馬高校や長野県立大学の取組を指していることが、今、検索して分かったので、「学校が」というのは合っているというのと、もしくは「学校と地域や家庭が連携することで」なのか、学校を核としたコミュニティをつくってほしいという意図だということ、今、思ったので、そこを普通の県民が読み取れないという感じがしたので、スクール・コミュニティの説明がここにあるといいと思いました。

西会長

スクール・コミュニティというのは、たしか最近の語彙ではないでしょうか。新しい概念で、今までコミュニティ・スクールというのは学校に人を入れることで、学校の中を活性化していきましょうということで、スクール・コミュニティは、開いていく形でやっていくという、そういう展開の仕方だったと、うろ覚えで、今、思い出しましたけれども、最後、方向性をどちらでまとめていくかということころは、結構重要なところだと思うのですが、いかがでしょうか。

信州型コミュニティスクールというのは、長野県全体で取り組んでいる事業ですので、恐らく次のステップというイメージを持ってもらう。これから5年間で、これまでやってきたコミュニティスクールの在り方をワンランクブラッシュアップしていくような形で開かれていくという方向性だと思います。方向性だけ共通了解しておきたいと思うのですが、この辺りの語彙はいかがですか。

毛受委員

今、お話になったスクール・コミュニティという言葉については、20年ぐらい前は学びの共同体と言われていて、それがコミュニティ・スクールとか、様々な実践が積み重なって、いろいろな施策が出来上がって、むしろスクール・コミュニティと言って、皆さんがこれはいいものだ、もしも伝わるものであれば、それこそ長野県が積み上げてきた一つの実践の成果ではないかと思います。

昔、学びの共同体という名前で行われていたので、その言葉に変えるのもいいのですけれども、スクール・コミュニティという言葉を使って、何だこれかと言いながら、学校を核としてみんながつながって、地域が一体になる、学校というのは、そういう機能を持つ

ているということを示す意味では、スクール・コミュニティというのはいいと思います。公民館と学校というのは砦だと思っています。地域をちゃんと機能させていくための砦として、みんなでそこでつながっていく機能があるということをもう少し強くうたい上げてもいいと思いました。

西会長

ポツのほうの書きぶり、前の文章の書きぶりは「が」の位置が違うので、ニュアンスが違っているという感じがするので、そこはもう一度チェックが必要かもしれません。

秋葉委員

今のこの議論はすごく重要なポイントだと思いながら、口を開いております。今回の射程が5年ということで、ただ、見据える先は2035年で、今、提言としてまとめようとしております。

先ほど御意見があったように、9ページの下から2行目のところで、学校と地域と家庭を並列にすることを御提案いただいて、そのことは確かだと思っております。一方で、今、森田委員からお話がありましたように、最後のポツの説明としては、アンマッチではないかという御指摘も確かにそうだと思うのですが、今の皆様の御議論を聞いていて、こんなふうを考えておりました。

学校がコアになってきたのは今までそうなのですが、少子化で学校が地域にないところが現実に出てきております。小学校はそれでもかなり残っているのですが、下手をすると中学校も、地域によっては小学校も10人足らずのところがあるにございます。その状況において、小学校が核と言われてしまうと、小学校がないところはやりようがなくなる。なくなるからということ以上に、せっかくオンラインがこれだけ普及して、誰もが情報発信できるし、情報を取りやすい時代になってきている中で、核をどこかに定めないといけないというよりは、いろんなところに分散して核があるという、自律発生的なイメージを私はイメージするので。

そうすると、先ほどの学校と地域と家庭は対等で並列で並べるほうがという御指摘は、未来志向的に考えたときにまさにそのとおりだと思います。とはいえ、現時点で学校が核になっている地域、公民館が核になっている地域も、現実、長野県内には人口が多いところはそうだと思いますので、過渡期的に、毛受委員からもお話があったスクール・コミュニティというものが一つのステップとして核になっていくというのは、5年間の射程的にはそうだと思います。

結論をもう一度整理すると、学校、地域、家庭というのが並列になっているというのは、未来形としてはぜひ書いておきたい。ただ、その手前のところで、一つの有効な選択肢として、スクール・コミュニティという、学校を核にしつつということ置いておくのは意味がある。そんなふうに整理をしながら聞いておりました。

先日も村の小学校、今、全校生徒が11人でどうしようみたいな地域に入ってお話を聞いていたので、なおさらそんなことを感じた次第です。

西会長

提言案の文章としては並列で三つを示して、施策としては「学校と地域、家庭が互いに」という、この文面のままでよろしいですか。

秋葉委員

これだけではなくて、施策のワン・オブ・ゼムです。

西会長

5年という、この提言が目指している期間の中での一つの選択肢としてということでしょうか。

秋葉委員

そのように考えておりました。

西会長

柳澤委員からチャットが来ております。全ての人の居場所であり、楽しい学び合いの場であり、カルチャースクールから一歩進んで、仲間づくりや地域課題の解決に向かう人材を育てるのが究極の公民館活動です。イコール自治力の向上を目指すというコメントが来ておりました。

そろそろ時間が迫ってきておりますが、4－3はいかがでしょうか。

特になければ、全体を通して御発言、この部分についてももう少し文言等、あるいはこういう施策として盛り込めるものがあるのではないかとということがあれば、御発言いただきたいと思いますが、いかがでしょうか。

松田委員

デジタルモバイルなどの変化が非常に激しい。この5年でどのように変わるのか。考え方として、PDCAなども変わってきて、最近はOODA、そういうことになってきているのですけれども、そうすると、今後5年間でどのように社会変化が起きていくかということは、私たち高齢者には全く分かりません。5年前と今を考えたら社会の進捗は全く違うし、今の議論とも違うので、その辺が今後どうなっていくのかと見据えた場合、気になりました。

西会長

現状認識の最初、不確実で正解のない時代、多様化の時代ということで、恐らく変化は加速度的になってきていて、かつての5年とか、10年という時間の感覚と、今、私たちの変化の速度はもうちょっと速くなってきている中で、5年先を見据えるということは、ある意味でいうと、どれくらい変わるのだろうと、今、我々も予測がなかなかできない状況なのだろうと思います。

その中で、5年という枠組みで、生涯学習なり、社会のコミュニティづくり、持続可能な社会づくりに向けての方向性を提言という形で示していく必要があります、そのことを求め

られているのだと思います。

毛受委員

オンラインの方にはお見せできなくて申し訳ないのですが、サマーセミナーという取組のパンフレットをお配りしました。生徒たちにどんな学びがあったかの感想文を書いてもらい、それを教員たちがまとめたものです。これを読むと、こういう講座の中で生徒はこういう学びをするようになる、市民はこういう感想を持つということが結構如実に書かれています。

例えば3ページのところを見ていただくと、“撤退戦としての脱成長”という斎藤幸平さんの講座に参加している感想の2番目です。長野高校の生徒、その次の東北高校の生徒、読み上げると、「今の世の中を変えていくのはZ世代である自分たちなのだ気づかされました。新しい考え方を自分より上の世代に受け入れてもらえるよう努力をしなければ、これからの世の中は変わらないと知りました。とても難しい言葉や単語も多く、理解するのに必死でしたが、今日の講演でたくさんのことを学ぶことができました。あまり政治に興味がなかった私ですが、もっと参加していこうと思いました」これは結構きっかけをつくっている感想文です。

このように、自分たちがこの社会を変えられるとか、自分たちが学び続けて変えていかなければいけないみたいなことの触発が若者にあったり、市民が面白い感想を述べたり、豊かになっていくということを描べたりということが書かれています。誰かが講師をやったり、学び合ったりというものになっています。このサマーセミナーは、今、尼崎とか、生駒などでも始めています。市民で講師をやりたい人とかを集めていくと、そこでも結構学び合いのコミュニティが生まれるので、こういう具体例は参考にさせていただくと思います。

もう一点、黒い冊子 (@18 VOL.07) ですが、これは高卒で就職する子たちに対して作った情報誌ですが、52ページを見ていただくと、社会人としてスタートした後どうなっていくのかということを書いています。自分たちは就職して終わりではない。そこから自分たちはキャリアアップしていくし、新たに学ぶこともあるし、転職したり、副業したり、いろんなことがある。だから、自分でキャリアを築いていくみたいなことをきちんと説明して、社会に送り出していくという内容は、生涯学習の学び手ということを意識したプログラムにしています。

こういうことが、今日、私が伝えたいことです。高卒とかそういう子たちは、就職するとそのまま固定化していくような学びに置かれるケースが結構多いのです。そこを生涯学習の学び手として、さらなる施策で巻き込んでいくということは、むしろその子たちは地域を支えていくような人材になっていくので、うまく施策に盛り込んでいただきたいと思っています。

西会長

全体を通してということで結構でございますけれども、ほかに御発言はいかがでしょうか。

オンラインで御参加の委員もいかがでしょうか。何か御発言があれば、承りたいと思

ます。よろしいでしょうか。

対面での御参加の委員、いかがでしょうか。よろしいでしょうか。

たくさんの御意見、また、本日の案についての文章の表現等々、御意見を頂戴いたしたところでございます。終了時間が迫っております。

本日いただいた御意見等を踏まえて、最終的な提出の案につきましては、私、委員長の西と事務局に御一任をいただいた上で、最終案という形に仕上げていきたいと思いますが、御了解いただけますでしょうか。よろしいでしょうか。

(「異議なし」と声あり)

西会長

いただいた意見は、できるだけ反映するような形で、最終的なものに仕上げてまいりたいと思います。修正については、私と事務局で早急にまとめてまいりたいと思います。

長時間にわたってお時間をいただきました。まだしゃべり足りないという方もおられるやもしれませんが、以上で意見交換を終了したいと思います。それでは、冒頭にも事務局から説明がありましたが、今後について、再度説明をお願いしたいと思います。よろしくお願いいたします。

(3) 今後の進め方

赤池生涯学習係長

冒頭にも説明をさせていただきましたけれども、今後について、再度簡単に御説明をさせていただきます。

画面は資料1ですけれども、今日いろいろと御意見をいただきましたので、私ども事務局と西会長でやり取りをさせていただきつつ、最終的に皆様にもまた見ていただきながら、確定という方向に進めていきたいと思っております。

10月頃をめどに県の教育長へ提言という形で進めさせていただきたいと思っております。

西会長

ありがとうございました。

本日の会議事項、用意したものは以上で全てでございます。

全体を通して何か御発言があれば、ここでいただきたいと思いますが、いかがでしょうか。よろしいでしょうか。

オンライン参加の皆様もよろしいでしょうか。

ありがとうございました。

それでは、進行を事務局にお返ししたいと思います。

3 久保課長御礼

久保文化財・生涯学習課長

本来であれば、教育長が参ってお礼の御挨拶を差し上げなければいけないところでありますけれども、所用により参っておりませんので、私から一言御礼申し上げたいと思いま

す。

昨年の9月から4回にわたって御審議をいただいていた本県の生涯学習・社会教育の振興の基本的な方向性や具体的な施策について、本日を含め、様々な視点から大変熱心に御議論をいただきまして、また、審議会としての提言をまとめる方向性を出していただいたこと、感謝を申し上げたいと思います。

昨年の9月の第1回からずっとコロナ禍の中での開催ということで、オンラインを併用しながらの進行で、各委員の皆様には大変ストレスをおかけした部分も否めませんが、皆様の御協力の下に議論を深めていただき、中身の濃い提言をいただけるという運びになってまいりました。

今後でございます。先ほど説明もございましたけれども、現在策定中の次期の教育振興基本計画、さらには長野県の総合計画に御提言を反映してまいりたいと考えております。

また、今後の我々長野県の生涯学習・社会教育の基本理念として掲げるとともに、議論の過程で具体的な施策についても様々な御提言をいただきましたので、反映してまいりたいと考えてございます。

現時点では、本日が今期の生涯学習審議会の最終回と考えております。皆様方には改めて熱心な御議論ありがとうございました。

4 閉会

事務局（増尾課長補佐兼総務係長）